

早稲田大学大学院日本語教育研究科

【2026年9月入学 修士課程】

一般入学試験

国費留学生等入学試験

学内選抜入学試験（第2回）

海外指定大学推薦入学試験

【2027年4月入学 修士課程】

学内選抜入学試験（第1回）

事前課題

課題文を読んで、2500字から3000字程度で設問に答えなさい。その際、資料や文献を参照し、それらを明記すること。参考文献や引用文献等のリストも上記文字数に含まれます。

設問

課題文では言語の聞き分け能力の調査について書かれています。調査の結果についてまとめたうえで、日本語教育に応用できる分野とその方法についてあなたの考えを述べなさい。

聞き分け能力の低下は食い止められるか

△中略▽自分の母語では区別しない音を聞き分ける能力は生後12か月までに失われるか、少なくとも低下するようです。それならば、その時期に、それらの音を聞き分ける言語のオーディオやビデオを使ったら、聞き分け能力の低下を食い止めることはできるのでしょうか。

たとえば日本語環境で育つ子どもでも、ゼロ歳後半のこの時期、英語のオーディオを聞かせたり、ビデオを見せたりしたら、LとRの聞き分け能力は、英語環境で育つ子どもと同じようになるのでしょうか。

これは、少なからぬ人が考えることのように、「実はうちの子どもには英語のビデオを見せています」とか、「大人用のオーディオ教材をずっと聞かせていました」という話は、私もちよくちよく耳にします。また、大学生から、「自分も子どもの頃、そういう教材を与えられていたらいいです」という申告を受けることもあります。ただし大学生の場合、そのあとたいがい「それで英語が得意になった気はしません」というコメントがつくのですが。

そこで、ゼロ歳後半の時期の赤ちゃんに、実際に外国語のオーディオを聞かせたりビデオを見せたりして、音の聞き分け能力を保つ効果があるかどうかを調べたのが、アメリカの心理学者クルーバーたちです。

この研究では、英語環境で育つ9か月の赤ちゃんを次のような4つのグループに分けました。

- ①オーディオ条件（中国語のオーディオを聞かせる）
- ②ビデオ条件（中国語のビデオを見せる）
- ③お姉さん条件（中国人のお姉さんに遊んでもらう）
- ④統制条件（中国語に触れさせることはしない）

①～③のグループの赤ちゃんは、4週間のあいだ、同じ時間、回数だけ、それぞれの方法で中国語に触れる機会を与えられました。なお、②のビデオに登場するのは、③お姉さん条件の女性、また、①のオーディオ条件で聞こえてくるのも、同じ女性の声でした。

こうして赤ちゃんたちに1か月過ぎてもらったあと、中国語では区別するけれども英語では区別しない音を、どれだけ聞き分けられるのかというテストをしました。

この聞き分けテストで取り上げられた中国語の音とは、おおよそ日本語の「チ」と「シ」に相当する音です。なお生後半年の頃には、それらの音の聞き分けは、中国語環境で育つ子どもも英語環境で育つ子どもも、そこそこできます。しかし、生後12か月になるまでのあいだに、中国語環境で育つ子どもの聞き分け能力はアップし、英語環境で育つ子どもの聞き分け能力は落ちていくことがわかっています。そこに、オーディオやビデオでテコ入れしてみた、というのがこの研究でした。

結果として、中国語に触れることは特にしなかった④統制条件の子どもたちの聞き分け能力は、既にわかっていたとおり、中国語環境で育つ子どもより低くなっていました。そして③お姉さん条件の子どもたちは、中国語環境で育つ子どもたちと同程度の敏感さを保ち、①オーディオ条件と②ビデオ条件の子どもたちの反応は、④統制条件のそれと同じでした。つまり、残念ながらオーディオやビデオではほとんど効果がなかった、ということになります。

なぜビデオはダメだったのか

ではなぜオーディオやビデオでは効果がなかったのでしょうか。

もしかすると、機械を通して聞く音では今ひとつだった、ということがあったかもしれません。しかし、それよりはるかに重要だったと考えられているのは、オーディオやビデオではなく、生身のお姉さんとのやりとりこそ、赤ちゃんにとっては意味ある状況だった、ということです。

ビデオのお姉さんは、赤ちゃんが聞こうとも思っていないタイミングで、急に話し始めたり、話すのをやめたりするかもしれません。それとは違い、生身のお姉さんは、赤ちゃんの様子を見ながら話しかけてくれます。

コミュニケーションは通常、まずは相手の目を見て、それから相手もこちらを見て、こちらの言うことを聞いてくれそうだな、という感触が得られてから開始されます。たとえば、知らない人に道を尋ねるのならば、まずこちらから声をかけ、相手がこちらを見てくれたら質問する、といった流れになっていないでしょうか。

このように、直接の対面状況では、お姉さんが話しかけるにせよ、赤ちゃんがお姉さんに微笑みかけるにせよ、互いに相手の様子を確認しながらのやりとりになります。また生身のお姉さんとのやりとりは、三次元の立体的な現実世界のなかで行われます。お姉さんは、実際におもちゃを赤ちゃんの近くまで差し出してくれ、赤ちゃんは、それに触れることもできるのです。

結果として、現実世界の意味あるやりとりのなかでこそ、赤ちゃんは、相手の話す声のなかで、区別しなければならぬ音がどれなのかがわかり、それらを聞き分けるようがんばります。そのようなことを、この結果は示しているように思われます。

母語の場合、赤ちゃんは、ふだんの生活で周囲の人が話すのを聞いているうちに「自然に」、必要な音の聞き分けができるようになっていくように見えます。ただ、それは赤ちゃんにしてみれば、誰かと楽しくやりとりするために必要な音の聞き分けだからこそ、一所懸命に耳を傾け、音の聞き方を学んでいくのです。

対して、一方的に聞こえてくるオーディオやビデオの音に、そのような必要性は感じられません。必要性やリアリティが感じられないのであれば、赤ちゃんは、聞こえてくる音を言語の音としては聞かないし、そこで区別されている音がどのようなものかも学ばない、ということなのでしょう。

だからもし赤ちゃんが複数の言語を同時に身につける環境があるとすれば、それは、周囲の人がそれぞれ別の言語を使って赤ちゃんに直接話しかけ、意味あるやりとりをする、というものしかありません。「それぞれ別の言語」と書きましたが、もっとも現実的なのは、父親と母親がそれぞれ別の言語を担当するようなバイリンガル環境でしょうか。

針生悦子(二〇一九)『赤ちゃんはことばをどう学ぶのか』中公新書ラクレ(六六一七二頁)